

## 宮本 輝「力道山の弟」論

藤 村 猛

### 要 旨

### 一 はじめに

三十年前、「私」たちの前に現れた男（自称・力道山の弟）は詐欺師であり、「私」はだまされて、インチキ薬（力動粉末）を飲み、腹痛に苦しむ。知人の喜代は彼と関係を持ち、妊娠する。父は怒り、乱暴を働く。その後、喜代は悦子を生み、父は悦子を可愛がる。それらの回想は、「私」たちの〈原風景〉としてあり、過去を鮮やかに甦らせる力を持っている。

### キーワード

〈力動粉末〉の袋 力道山の弟 喜代の妊娠と出産 父と悦子

「力道山の弟」（小説新潮）1989・3）は、語り手の「私」が三十年前に遭遇した出来事を回想する物語である。作品（全四章）の一章は、「私」による喜代や父、および〈力動粉末〉の空き袋の回想であり、二章は喜代と「私」の家族の説明が、そして、作品の中心となる三章は、三十年前の力道山の弟（自称）との出会いや、喜代や父たちの騒動などが描かれる。最後の四章は、父と悦子（喜代の子）の回想である。

作品は、昭和三十年代の尼崎を舞台としており、日々を精一杯生きる人々が登場して、彼らを語る「私」の目は概ね温かい。文庫本の解説者・饗庭孝氏は、この作品を、「転変きわまりのない庶民の生活のニュアンスを精細微妙にかきわけ、作者は何気ない言葉に比重をのせて鮮やかに作品のポイントをきめてゆく<sup>1)</sup>と評価している。例えば、詐欺師である力道山の弟とサクラの老人の言動は生彩があり、彼らが引き起こす事件や、それに対する「私」や父たちの

描写も印象的である。

同時に、この作品では、「私」の父に対する心情も注目される。「私」の父は乱暴者で、作った会社を倒産させたり、麻雀屋に入り浸っているが、同時期の他の作品（「真夏の犬」や「階段」）に描かれた父親たちと比べれば、情のある、他人のために働く人物として描かれている。

饗庭氏は、父を「情にもろい・一本気の性格」であり、その「巧みな表現」により「しみじみとした味わい」を醸しているとする。安藤始氏も、「私」にとって「尼崎が『原風景みたいなもの』であると同時に、「父の存在が心の『ふるさと』となつて」いると言う。語り手「私」の心情や行動を読み、力道山の弟や父たちに対する思いを明らかにして、作品の特徴や良さを考える。

## 二 〈力動粉末〉の紙袋——一章——

作品は、次の文章から始まる。

私の手元に〈力動粉末〉とゴム印を捺された小さな紙袋がある。薄いハトロン紙で作った縦十センチ、横五センチのその袋には、〈力動粉末〉という名の薬が入っていたのだが、中身はとうに捨てられ、茶色くにしんだ袋のへりはすりきれて、あちこちが破れかけている。(583)

今から二十年前に父が死んで、「私」は「何か金目のものはなからうかと、あさましい魂胆で、物色したとき」、「父の遺品の中に混じっていた」〈力動粉末〉の袋を見つける。その袋は、父が「日ご

ろ使っていた手文庫の底に埋もれていて、「とりわけ大事そうに、折った半紙に挟み込まれるようにして」しまわれていた。

「私」は、それを見たとき、当時（昭和三十三年）のことを思い出す。

私は、その薄っぺらな袋を目にしたとき、思わず、あれっ？と声をあげた。私の心に、十一月の終わりの寒風の吹きまくる駅前広場がひろがった。その〈力動粉末〉なる怪しげな薬を買って帰ってひどい目に遭ったのは、小学校五年生だった他ならぬ私自身で、昭和三十三年のことである。(583)

小学生五年生の「私」にとって、その事件は衝撃的なものであった。そして、袋を大事に取っておいてくれた父への思いもあって、袋を捨てるに忍びず、「一冊の詩集に挟み込んだまま、二十年間、本棚の隅に保存してきた」(584)のである。

だが、二十年間の時間的経過と明日の悦子の結婚式を前にして、「私は、どうでもいいような過去を抹消するために」、袋を焼却しようとする。だが、彼は「あの日の、父のあらゆる心と悲哀」を想いながら、あらためて、「どうして父は、この一枚の袋を捨てずに、大切に取っておいたりしたのだろう……。」(584)との疑問を持つ。(この疑問と答の追求が作品を底流している。)

作品の二章以降に、〈力動粉末〉をめぐる三十年前（昭和三十三年）の事件と、その「証拠」を大切に取っておいた父への思いが展開していく。

## 三 喜代と父―二章―

二章で紹介される喜代は、「父の友人であった高万寿の妻」であった。高万寿について、次のように説明される。

高万寿は、中国の福建省出身の商人で、日中戦争が始まる直前まで、神戸に事務所を持っていた。戦前、対中国貿易で財を成した父とは親友で、日本人女性と結婚したのだが、日中戦争勃発の数日前、妻を残して中国へ帰り、それきり消息は絶えたのである。(584)

引用文中の日本に残された妻というのが、喜代である。彼女は幼少期に両親と死別し、「いろんなところでいろんな苦勞」した後、神戸の料亭で仲居をしていたとき、高万寿と知り合う。高万寿は「純で一途な、前途洋々たる中国人」(598)であり、そんな彼が「命懸けで好きになった女」が喜代であった。しかし、「時局が時局だけに、籍は移さず」(585)、喜代は高の内縁の妻となる。

ところが、高は、「日中戦争勃発の数日前、妻を残して中国へ帰り、それきり消息は絶え」(584)る。(当時の喜代は、「いま咲いたばかりの花みたい」(598)だったと、父は回想する。)

戦後の喜代は独り身で、「いつも化粧気のない小作りの顔の中にそばかすが散った、無口な人」(584)であった。家族づきあいをしてきた「私は、幼少のころから、彼女を喜代ちゃんと呼び、いろんなところでいろんな苦勞をして大きくなった人なのだという目」で見ている。彼女は苦勞の末、昭和三十年に「父の裁量や資金作りの

ための奔走」(584)もあり、尼崎の玉江橋の近くに、麻雀屋を開店した。

父は喜代に、中国に行ったきりになった高万寿を諦め、再婚するようにと言っていた。が、彼女は、「私」の母いわく、「言い寄ってくる男は山ほど」いたが、「いつペンでも、ふらふらつとその気になったこともなかった」(597)。それが、「力道山の弟」と詐称する香具師と関係し、妊娠してしまう。「私」の父母からは、「魔がさした」とか、「気が狂うた」とか言われるほど、香具師の男は悪い評価(父からは「力道山の弟やなんて言うて、わけのわからん粉を売ってる、薄汚い男」)を受けていた。事実、男に喜代への深い愛情などなく、尼崎駅の「広場に姿をあらわした日から三日間、喜代ちゃんの店の二階で寝起きしたあと、鼻唄まじりで、胸を張って出て行」(597)き、二度と彼女の前には現れなかった。(彼女の妊娠を知らなかったのかもしれないが。)

喜代の妊娠を怒った父は、麻雀屋で暴れる。

彼女は、「力道山の弟」との関係が一度限りのものだった、即ち、彼とはそんな関係だったことよりも、自分の妊娠に荒れ狂う父の姿に衝撃を受けたのではないか。店を父に壊されても、彼女は「無抵抗なまま泣いて」(598)いたのである。彼女の中には、父に対する罪悪感があったのだろう。その後、彼女はシングル・マザーとして、悦子を生む。

次節において、香具師(自称・力道山の弟)の詐欺ぶりを見ていく。

## 四 力道山の弟—三章—

昭和三十三年の冬、阪神電鉄の尼崎駅前の広場では高架工事が始まり、「仕事にあぶれた日雇い労務者」や朝鮮人の老婆、そして、学校帰りの中学生たちが行き来していた。

そこに、京都大学工学部の学生と自称する若者が現れ、人々に巧みな会話で、一冊百円の本（インチキ本）を売る。ここに見物の「私」がいて、学生の商売に利用されるが、それはそんなにひどい詐欺ではない。少なくとも、〈力動粉末〉のような害のあるものではない。

続いて、力道山にそっくりの男が登場する。

パーマをかけた短い頭髪を後ろになでつけた色の浅黒い男は、黒いタイツ一枚になり、隆起した筋肉を誇示して、腕を廻したあと、鞆から煉瓦や五寸釘や出刃包丁を出し、行き過ぎようとしている人間を呼び停めた。(587)

そして、彼は次のように言う。

ひとりの男が、衆人の前で身をさらし、恥をしのんできょう一日の糧を得ようとしているのを、きみは黙殺して、自分だけの人生に生きようとしている。きみはそれでも血の通った人間か。(587)

気の弱い人間であれば、これだけでも男の話の聞かなければと思うだろう。しかも、男は力道山に「生き写し」なのである。彼は続けて言う。

## 四

私は乞食ではない。乞食以下なのだ。日本の英雄である兄の名に汚名をきせ、五尺七寸二分のこの身でもって、自分だけではなく、日本国民が誰ひとり知らぬ者のない兄の生き恥をもさらしている。来なさい。こっちへ来て、しばし、ひとりの人間の、哀しい生き恥とつきあってみたまえ(588)

当時のスーパースターの力道山と似ているだけでもすごいのに、力道山の弟だと言うのである。当然、人々は不思議がる。彼は、次のように言い泣く。

私はプロレスの厳しい練習に耐えられず、兄のもとから逃げだして、こうやって大道芸に身をやつした(588)

彼は兄に「縁を切れられ」、各地を二年間、流浪していると云う。人々はざわめき、小学五年生の「私」は興奮する。彼のパーフォームは続く。五寸釘を持ち、両方の指で曲げる。しかし、それらを見せることが彼の目的ではない。彼の目的は、インチキ薬（力動粉末）を売ることである。続いて、自分のことをより信じさせるために、「サクラ」を登場させる。

男の演説に対して、見物客の一人の痩せた老人が「アホクサ！」と怒鳴る。老人は、「難波球場近くのホルモン焼き屋」(589)の主人であり、店によく来る力道山とは親しくしていて、「あの人がプロレスラーになって以来の友だち」であると言う。老人は力道山から弟の話聞いたことも、弟を見たこともないと言う。それに対して、男は即座に、老人が「福助」という店の主人だと言い、

私は、弟として、ずっと縁の下の仕事をしてきた。私と兄とが、あまりにも似ているため、あえて私は、兄と行動をとものに

するのを避けたのです。あなたのことは兄から聞いています。難波球場の特設リングで試合をするときは、必ず花輪を届けて下さる福助のご主人は、丹波文造さんだ。(589)

老人はそれを聞き、「茫然とした表情で、力道山の弟を見ていたが、やがて顔を歪め、目に涙を溜め」、自分が丹波文造だと認める。男は「どうか、兄には黙っていて下さい」と言い、老人は「本当に泣いていた」(590)。(もちろん、この老人は「サクラ」である。)

その涙は、聴衆の幾人かにも伝わって、目頭を指でぬぐう人々たちを私は見た。老人は、足早に去り、その老人に深く頭を下げつづける力道山の弟の肩が、寒空の下で艶やかに光っていた。(590)

これらのことが本当のことであれば、感動的な場面である。しかし、三章の後半で明かされるように、男と老人は詐欺仲間であり、聴衆を騙そうとしていた。だが、男と老人のやり取りは迫力があり、表情もセリフも真に迫っている。どこかおかしいと思っただけ、大半の人は信じるのではないだろうか。

これが現代であれば、情報伝達的手段も多く、力道山の秘密の弟などで騙される人はいないだろう。しかし、昭和三十三年ころと言えば、まだ、(現在に比べれば)、人々は他人を疑わず、また、様々な事情で、近親者と別れた人々も多くいた。例えば、戦争によって離ればなれになった人々たちも多かった。力道山の弟に何らかの理由があると、聴衆は思っただけではないか。

## 五 〈力動粉末〉と「私」

香具師の男は、聴衆に自分が力道山の弟だと信じ込ませ、「商売を始め」る。

額で石を割り、五寸釘を何本も折り、そして、私に目をやる

と、

「坊や。青びょうたんのようだな」と言った。(中略)

力道山の弟は、靴から小さな紙袋を出した。(力動粉末)とゴム印が捺されている。力道山の弟は、(力動粉末)こそ、じ

つは兄である力道山が、台湾の漢方医に特別に作らせた秘薬であると説明し、スプーンで袋の中の褐色の粉をすくって、私に口をあけると命じた。

私は、多くの人間たちの中から選ばれたことが嬉しくて、精一杯口をあけ、力道山の弟がスプーンで入れてくれた苦い粉薬を服んだ。(590)

当時、力道山はスーパーヒーローであり、力道山の弟がこんな場所を薬を売りつけるのは、よく考えればおかしいのだが、間近に見る彼は、「胸の筋肉も、やや太鼓腹の胴体も、何もかもがテレビで観る本物の力道山とそっくり」なのである。しかも、口がうまく、彼を保証する人間(丹波文造)もいるのだから、大半の人は信じたのである。

高架工事の杭打ち機の音がやみ、勤め帰りの人々で、群衆は

さらに数を増した。私は力道山の弟から五寸釘を渡され、それを指で曲げてみると言われた。(591)

当然のことながら、力のない「私」が五寸釘を曲げられるはずはない。ところが、「五寸釘は難なく真ん中からくの字に曲が」る。冷静に考えれば、あり得ないことであり、この釘には、細工<sup>(6)</sup>があったのである。

「私」は、五寸釘を曲げられたのは、〈力動粉末〉の力だと思ふ。家に急いで帰り、母に「二百円ほしいとねだ」る。母は、「駅前で商売をしている人間が売つてゐるような葉なんか服んだら、お腹こわして、えらいことになるわ」と言い、聞き入れない。母の方がまともな判断なのだが、力道山の弟や老人を実見し、かつ、曲がった五寸釘の体験によって、「私」はいつになく強く、母に頼み続ける。

私は母の背中を突いたり、尻を殴ったり、最後は台所に正座して頭を下げて頼んだが駄目だった。ふてくされて表に出、絶対に不良になつてやると私は思った。(592)

「私」は路地の壁に凭れて、母の呼ぶ声に知らん顔をしていたが、「喜代ちゃんところで、麻雀をやつてはる」父を呼んでくるようにと言われる。父は手形を落とすために、金策に走り回つて、その手形が昨夜落ち、今日の昼過ぎから麻雀をやつていたのである。

母の拒絶によつて、〈力動粉末〉を手に入れなかった「私」は、不満であるが、母の言いつけに従ふ。

## 六 麻雀屋にて

喜代の麻雀屋に着いた「私」は、中に入つて、父を探す。父は、一番奥の席にいた。

私に気づいた喜代ちゃんが、よく通る細い声で、

「きょうは、お父ちゃんはなかなか帰られへんわ。えらいつてはるから」と私に笑顔で言った。(593)

店でやつてゐる麻雀は、「一局終わるたびに、店が発行する券で支払い、それを帰るとき帳場で金に換える」システムであった。父は二千円以上勝つてゐた。(券は、煙草の「いこい」の券で四十枚以上あった。当時、「いこい」は五十円程度であった。)ところが、「私」が父と麻雀している男を見ると、力道山の弟だった。

私は男を見て、あつと声をあげた。(中略)

「力道山の弟や」と私は叫んだ。客たちはみんな笑い、力道山の弟も、

「おつ、お前、さっきの青びようたんじゃねエか」と言った。

「お父ちゃん、この人、力道山の弟やで」

私が父の上着を引っ張りながら言うと、父は、

「わしには、力道山の隠し子やて言ひよつたぞ。そのうち、ほんまの力道山になりすましよるかもわからんな」と言つて笑つた。(594)

力道山の偽弟が、父たちと麻雀しているのである。しかも、彼が負けて代わつた男が、あの老人(丹波文造)であった。「私」は

「交代した男をいつまでもぼかんと見つめつづけた」が、やがて、二人がぐるであつたことに気づく。しかし、〈力動粉末〉の効果を、まだ「私」は信じている。男が便所に行くのを見て、

私は、牌をかきませている父の目を盗んで、いこいの券を四枚、そつとポケットにしまった。そして、便所に行った。(595)

便所で「上半身をタオルでぬぐっていた」男に、

私は、父から盗んだ二百円分のいこいの券を出し、〈力動粉末〉を売ってくれと頼んだ。(595)

「私」はまだ、五寸釘のインチキを悟っていない。男は、「お前、これ、ちゃんと親父に貰ったのか？」と聞き、「泥棒はいかん」と言いながらも、「上着の内ポケットから、〈力動粉末〉を出し、四枚のいこいの券をひったく」る。

「私」は、袋から粉薬を出し、口に入れた。それは、「広場で飲んだものよりも数倍苦」いものであり、「吐き出しそうになつたが、水と一緒に服み下」す。その効果は、数時間後の「猛烈な下痢」となる。夜の十時すぎ、寝ようとしていると、ひどい腹痛が始まつた。

私は便所に走り、蒲団に戻るたびにひどい腹痛で体を丸めて転げまわつた。(596)

男が、薬の調査に失敗したのかもしれないが、薬の値段(二百円)よりも、腹痛の方が罪深い。(ここまでの害を、インチキ薬を買つた人に与えたとすると、警察沙汰になる可能性がある。「私」のような腹痛(猛烈な下痢)になつた人は、他にはいなかったのかもしれない。)

夜中の二時に、「私」が「食べた物を吐き始めた」ので、母と病院に行こうとしていたとき、父が帰つてきた。そして、

「盗みをはたらいた罰や」

父は言つて、私の頭を平手で殴つた。(中略)

「アホめ！」と怒鳴つて、枕や茶碗を壁に投げつけた。(597)

「私」は父が自分に怒つていると思つたが、「父の異常な怒りの対象は、私ではなく喜代ちゃんだった」のである。

#### 七 喜代の妊娠と父の怒り

喜代は力道山の弟と肉体関係を結び、それを知つた父が怒つたのである。腹痛の余り一睡も出来なかつた「私」は、「父と母のひそ話」を聞いた。

「高さんとのあいだに子供でもいてたら、喜代ちゃんも、そんな魔がさしたようなことはせえへんやろにねエ」と母が言つた。

「よりによつて、あのどこの馬の骨やらわからん香具師と……。女はアホか。俺には、気が狂うたと思えん。力道山の弟やなんて言うて、わけのわからん粉を売つてる、薄汚い男と……そんなに男のチンポが恋しかつたら、なんで俺の勧めた男と所帯を持たなんだんや。(以下略)」

「力道山の弟……。そう言うて日本中を転々としている香具師……。喜代ちゃんが、そんな男と……。私、どうにも信じられへんわ。言い寄ってくる男は山ほどおつたんやで。いっぺんで

も、ふらふらつとその気になったこともなかった喜代ちゃんが……」

母はどうにも信じかねるといった口ぶりで言った。(597)

その後、喜代の妊娠が分かる。それを知った父は、「店の麻雀台を叩きつぶし、麻雀牌を喜代ちゃんの体に、つぶてのようにぶつけ、長椅子を持ちあげて、入口の扉や壁や帳場をこわす。」「私は、「阪神国道を挟んだ向かい側の電柱に隠れて、父が暴れている姿と、無抵抗なまま泣いている喜代ちゃんを見ていた。」(598)

やがて、「通りかかった人のしらせで警官が駆けつけ、父は連れて行かれた」。

夜ふけに帰って来た父は、「私」に「力道粉末の味はどうやった？」と言い、微笑んだ。そして、「力道山の弟」などいらないと「私に嘔んで含めるように言い聞かせ」、「喜代は、子供を墮ろす気はないそうや。あの氏素性のわからん、ゆきずりの男の子供を、なんと本気で産むつもりや」と言い、「ふいに、獣みたいな吠え声をあげると、畳を何度も力まかせに拳で叩き、それをやめさせようとむしゃぶりついた母を殴」(599)る。親友だった高万寿への思いは分かるにしても、喜代の不倫・妊娠への怒りは、いささか異常である。元々、暴力的な人間だったとしても、店を壊すのは行きすぎであり、何の関係もない妻を殴るのもそうである。

恐らく、父は喜代が好きだった。即ち、親友の妻に対する好意以上の愛情があり、喜代の裏切りに耐えられなかったのだらう。

対して喜代は、若い香具師（力道山の弟）に惹かれた。高と別れて二十年近く経っている。別れたときの高は二十八歳であり、香具

師の男（力道山の弟）と年齢的に近い。そして、妊娠したとき、彼女は三十歳代後半―四十歳に近い―である。子供を産むとしたら、ラストチャンスだったのだらう。男の魅力と、喜代の「女」としての情が、行きずりの男と肉体関係を結び、妊娠・出産となったのかもしれない。（この後、喜代が子宮癌で死ぬのは、娘の悦子が九歳の時である。）

#### 八 喜代の娘・悦子

父の会社が、翌年の二月に倒産し、「私」たちは古い知人を頼って、岡山に逃げ、そこで五年間すごした。岡山に住んで一年後、喜代に娘（悦子）が生まれる。四年後、

私たちが大阪に舞い戻ってすぐに、喜代ちゃんは幼い娘の手を引いて訪ねてきた。けれども、父は二人に逢おうとはしなかった。(599)

仕方なく、母が彼女に会い、近況を父に知らせた。喜代は、「子供の父親は、あれつきり、姿を見せへんけど、自分にはそのほうがありがたい……。」と言い、麻雀店は「よう繁盛してる」とのことであった。生活苦もあって、その後、三年近く「母は父に内緒で、喜代ちゃんに金を工面してもらっていた。」金の受け取りは「私の役目で、「そのたびに、私は悦子を駅前広場に連れて行って遊んで」やる。新しくなった広場にはすでに、大道芸人などいなかった。

悦子は「よく喋り、細かいことによく気がつく子だった。」(600)



(例えば、「私」の学生服のボタンが取れかかっていると、繕つてくれる子だった。) そんな悦子が「広場にいと、ガスの貯蔵タンクが見えないので嬉しい」と言う。「私」も「あのでっかい丸いタンク」が嫌いで、「見てたら、寂しい」と言う。(かつて、父が喜代の麻雀店で暴れていたとき、「ガスを貯蔵する巨大な円形」のタンクが「冬の日に照らされているのを、私は寂しい風景として感じ」(598)ていた。)

「私」にとつて、ガスタンクは衰えていく「父」と対照的な存在だと受け取られていたのかもしれない。つまり、ガスタンクは新しい時代の象徴である。父が嫌いというのではない。かつては巨大な存在だったのに、時代に取り残されていくという寂しさが、「私」にはあるのかもしれない。(悦子も感受性の鋭い子だったのだろう。)

喜代が子宮癌で死んだとき、悦子は九歳だった。(ここから四章) 彼女は父の紹介で、「子供のいない」、「父の古い友人夫婦」——「地味だが実直で堅実な生活をしている中年の夫婦」——の養女となる。その後、父は「私」たちには内緒で、悦子と会い、食事や映画に連れ行ったりしていた。

父が亡くなる三ヶ月前、父は悦子を神戸の元町に連れて行き、食事をした。そこで、高万寿の話(「頭のいい、誠実な、男前の素晴らしい男だった」云々)をして、「悦子のお母さんとも仲良しやったんや」(601)と言う。そして、〈力道山の弟〉が使っていた五寸釘を見せ、悦子に指で曲げさせる。父は、その五寸釘が「ハンダ」で作られているとネタばらして、「悦子が気味悪く感じるほど、いつ

までも楽しそうに笑った<sup>(9)</sup>。自分の死を予感していたかどうかは分からないが、以前とは違い、性格が丸くなり、過去が愛おしくなっていたのかもしれない。その証拠に、母が喜代から金を借りていたら告白したときも、ひとこと「そうか」とつぶやいただけであった。そして、〈力動粉末〉の袋を手文庫に大事にしまっていた。

力道山の弟の事件は三十年前、父の死は二十年前であるが、〈力動粉末〉は「私」に、時を越えて、過去を甦らせる。そして、それは、父を中心とする懐かしい人間模様を、「私」にもたらすのである。

この作品には、取り戻せない過去(人生)を再現・再体験させる力がある。少なからぬ年配の読者たちは、「私」と似たような体験をしている。確かに、「私」の〈力動粉末〉をめぐる体験や「私」の父は、いささか特殊かもしれないが、それらは子供時代の、そして、〈父親〉の「原風景」とも言え、共感や懐かしさ<sup>(10)</sup>を呼ぶのではないか。

「私」たちの原風景として、〈尼崎〉や父は存在し、過去の人々を鮮やかに甦らせる。宮本輝の回想形式の作品の魅力であり、力だと言ってもいい。「力道山の弟」は、そういった意味で評価できる。

(注)

(1) (2) 『真夏の犬』(文春文庫 1993・4)の「解説」による。

(3) 引用は、安藤始『宿命と永遠—宮本輝の物語—』(おうふう 2003・10)による。

- (4) 「力道山の弟」の本文は、『宮本輝全集』13（新潮社 1993・4）による。(一)内の数字は、全集の頁数である。
- (5) 喜代の夫の高万寿も生きていれば、やがて、来日できるかもしれない。少なくとも、その可能性はゼロではない。
- (6) 作品の最後に、そのインチキが明かされる。父は悦子に、男が使った五寸釘を曲げさせ、「これは鉄と違う。ハンダや。ハンダで作ったインチキな釘や」(601)と言う。
- (7) 〈力動粉末〉は「一袋五日分・二百円」である。当時、「二百円あれば、商店街の洋食屋で、目玉焼きの載ったハンバーグが二人前食べられ」(608)たのである。現在の金銭感覚で言うと、二千円程度であろうか。
- (8) 「私」や悦子が見ているガスタンクは、昭和三十五年に新造された、尼崎のシンボルの建造物である。昭和三十三年のそれは、新造以前の古いガスタンクであった。新旧いずれのガスタンクも、「私」にとつては、巨大なものとして映っていたのだろう。
- (9) この場面は、宮本の小説「力」のラストシーンでの父の哄笑を連想させる。父としての愛情を感じさせるものであり、それを回想することにより、子供としての父への思いを表していよう。
- (10) 「私」の父と似てない点も多いが、「私」の父に、映画「男はつらいよ」の主人公「寅さん」と近いものを感じる。読者は、両者に懐かしさを覚えるのではないか。それは一種の郷愁と言っていいかもしれない。